傾向であった．その他のタイプのうち特に集積程度の強いものは血清鉄値は低値を示していた．血清蛋白，アルブミン値との関連性はなかった．脛骨までの描出例は骨への摂取，その他は骨髄への摂取を推定した．

9. 骨シンチで陽性像を呈した悪性中皮腫の一例

丸山　邦弘　堀川よしみ　伊藤　健吾
岡江　俊治　石口　恒男　大島　統男
石垣　武男　佐久間貞行　（名古屋大・放）

症例は65歳女性であり，悪性胸膜中皮腫のため，胸部に二度，骨盤部転移巣に一度，手術を受けていた．転移巣による不正性器出血があり，止血目的の放射線治療のため入院した．CTならびに単純写真で，胸部と骨盤部に石灰化を伴う腫瘤影が見られ，骨シンチでは，それに一致して著明な陽性像を呈した．病理組織像では，結合組織性の腫瘍組織内に散在する石灰化が見られた．

悪性中皮腫に対するシンチグラフィーとしては^{67}Gaシンチの有用性が報告されているが，本症例は，^{67}Gaシンチばかりでなく骨シンチで陽性像を呈し，石灰化と相関を示す稀な症例であるので報告した．

10. ^{99m}Tc-HM-PAOによるMatas負荷時の脳血流変化の検討

Isa Neshandar Asli　Mohamad Eftekhali
Javad Esmaili　（テヘラン大・核医学セ）
松田　博史　大場　洋　関　宏恭
寺田　一志　辻　志郎　今井　啓子
久田　欣一　（金沢大・核）
東　壮太郎　（同・脳外）

^{99m}Tc-HM-PAOを用いてMatas負荷時の脳血流変化の検討を行った．安静仰臥位にてHM-PAOを20 mCi投与し負荷前の脳血流像を撮像した．その後4〜5分のMatas負荷を行い，その負荷開始30秒後に再度HM-PAOを20 mCi投与し，その後，負荷後の脳血流像を得た．負荷後のイメージから負荷前のイメージを差し引くことによりMatas負荷時における脳血流分布像を得た．本検査は脳の副血行路の検索に非常に有用であり，定量的評価が可能である．

11. 虚血性脳血管障害における血液プールECTの意義——脳血流ECTとの比較検討——

仙田　宏平　伊藤　茂樹　中条　正雄
嶋田　博　安江　森祐　辻　明
（国立名古屋病院・放）

Tc-99m-RBCによる脳血液プールECT(以下，RBC)をI-123-IMPによる脳血流ECT(以下，IMP)施行直後に行い，得られた局所脳血液量および血流量分布画像を病態等とも対比して比較し，本検査法の意義を検討した．対象は虚血性脳血管障害等患者25症例であった．RBCは，cold PYP溶液1 mlをI-123-IMP 3 mCiと同時投与し，体内標識法で行った．RBC像はIMP像の集積低下領域または近傍に高，等または低集積を示した．高集積は発症後約10日以降または経過良好な症例で，逆に低集積は発症後約10日以前または経過不良な症例で高頻度に認めた．また，低・高混在集積を呈した症例の一部でIMPの低集積領域周囲に高集積を示した．

12. ^{123}I-IMPによる局所脳血流量(rCBF)の定量評価

外山　宏　竹下　元　江尻　和隆
片田　和廣　伊藤　清信　富田　和美
竹内　昭　古賀　佑彦　（保衛大・放）
成田　孝枝　加藤　幸彦　（同・放部）

^{123}I-IMPによるrCBF定量評価を試み，^{133}Xeと比較検討した．装置はHEADTOME SET-031を用い，対象は正常ボランティア5人と疾患群10人で，^{123}I-IMPは静注直後1 frame/分にて10分間持続動脈採血し，microsphere modelに従ってrCBFの定量評価を行った．脳の放射能濃度は10 frame目の画像から求めることにより，inputと脳のresponseの算出を同一時間とした．^{133}Xeとの相関を求めたところ，^{133}Xeでrcbf 40 (ml/100 g脳/min)以下の群ではr=0.71と比較的良い相関を示したが，^{133}Xeでrcbf 40 (ml/100 g脳/min)よりも高い群ではr=−0.18と相関が認められなかった．rCBFの保たれている部位には静注10分間でもmicrosphere modelを適用し得ない種々の要因があり，検討が必要と思われた．

Presented by Medical*Online